「キラキラネーム」の表記とその使用頻度
—新聞と学術文献の分析—

荻原 祐二（東京理科大学 教養教育研究院，yogihara@rs.tus.ac.jp）

Notations of “kirakira name” and their frequencies of usage:
Analyses of newspapers and academic literature

Yuji Ogihara (Institute of Arts and Sciences, Tokyo University of Science, Japan)

Abstract

A previous study reported that “kirakira name (both in katakana)” and “DQN name (DQN in capital alphabet and name in katakana)” were the most frequent notations in representative dictionaries and encyclopedias. However, it explored only dictionaries and encyclopedias, which made it unclear whether the same pattern was found in other media. Therefore, this study examined variations of notations and their frequencies of usage in mass media and academic community by analyzing newspapers and academic literature. Results showed that consistent with dictionaries and encyclopedias, “kirakira name (both in katakana)” and “DQN name (DQN in capital alphabet and name in katakana)” were the most frequent notations and similar notations were rarely used. In contrast, in newspapers, to avoid negative nuances, “DQN name (DQN in capital alphabet and name in katakana)” and its similar notations were never used. Moreover, to reduce the numbers of letters and sounds, abbreviated notations of “kirakira name (both in katakana)” were sometimes used. Understanding these differences by medium enables us to clarify the meaning and function of kirakira name and DQN name and efficiently use different methods to search and mention them depending on medium.

Key words

kirakira name, notation, newspaper, academic literature, name

1. 問題

キラキラネームとは、広義では「頻度が低い名前」を意味し、狭義では「頻度が低い名前」に加えて「伝統から逸脱した名前」や「読むことが難しい名前」（荻原，2015; 2022c; Ogihara, 2020; 2021b; 2021c; 2022c）、「肯定的または中立的な文脈で用いられる名前」といった要素を併せ持つ名前を意味する（荻原，2022a）。例えば、「俗に、一般的・伝統的でない漢字の読み方や、人名には合わない単語を用いた、一風変わった名前」（大辞泉）や「通常の名付けの型にはまらない名前を俗にいう語」（大辞林）と定義されている。近年の日本において、頻度の低い個性的な名前が増えているという報告から（Ogihara, 2021a; 2022a; Ogihara et al., 2015; Ogihara & Ito, 2022）、この広義においては、キラキラネームが増加していると言える（荻原，2022b）。

また、キラキラネームと類似もしくは同じ概念を示すものとして、「DQN ネーム」がある（荻原，2022a）。「DQN」（「どきゅん」と読む）とは、「非常識な行動や周囲の迷惑を顧みない行動をする者をいう俗語。主にインターネット上で用いられる蔑称」（大辞泉）や「頭が悪い人，非常識な人などをさすときに用いる語」（大辞林）とされており、そうした人々が与えた名前を意味する。例えば、「社会的に許容されにくい日本の子どもの名のこと。いわゆる珍名であり、『キラキラネーム』とも呼ばれる」（知恵蔵 mini）や「常識的な読み方から逸脱した珍奇な名前、奇を衒ったような難読名、などを侮蔑を込めて呼ぶ言い方」（実用日本語表現辞典）と定義されている。DQN ネームは、キラキラネームと同一の概念として扱われることもあれば、キラキラネームと比べて否定的・侮蔑的なニュアンスが含まれ、使用される文脈が異なる点で区別されることもある（荻原，2022a）。

この「キラキラネーム」と「DQN ネーム」には、複数の表記がある。例えば、「キラキラ」と「DQN」の部分に、カタカナやアルファベットではなく、ひらがなを用いた「きらきらネーム」や「どきゅんネーム」が挙げられる（荻原，2022a）。また、「ネーム」部分も、「ねーむ」とひらがなで表記されたり、漢字で「名前」や「名」として用いられることがある。本研究では、これらキラキラネームと DQN ネームにはどのような表記があり、それらがどの程度使用されているのかについて検討する。

1.1 表記とその使用頻度を検討する意義

特定の概念を示す表記にはどのようなものがあり、それがどの程度使用されているのかを把握することには、少なくとも 4 つの意義がある。第 1 に、特定の概念がどのように表記されるのかを理解することは、その概念そのものを理解することの基礎であり、必須である。特に、比較的新しい概念に対する表記は、その歴史が短いために表記が安定せずばらつきが生じて、表記のゆれが生じやすくなるため、その整理が必要となる。

第 2 に、表記の違いに概念の本質的な違いが反映されている場合がある。つまり、単なる表記上の表面的な違いではなく、当該の概念の区別が表記の違いによって示されていることがある。例えば、一般的には漢字で表記されるものを、敢えてカタカナ表記にすることで、海外由来であることを強調したり、一般的な意味と区別して

強調することがある。

第 3 に、表記とその使用頻度を把握することは、当該の概念を検索して、その情報を効率的に収集することに貢献する。Google や Yahoo などの検索エンジンを用いる時や、研究者が文献を探す際にも必要となる。特定の概念について調べる時に、ある表記では情報が見つからない場合も、別の表記では情報が見つかることもある。また、限られた時間の中で対象の概念をおおよそ理解したい時にも、どの表記が頻繁に使用されているのかが事前に既知であれば、効率的な検索が可能となる。例えば、網羅的な検索が現実的に難しいような時には、最も頻繁に使用されている表記を用いて検索を行えば、おおよその理解にたどり着きやすくなると考えられる。

第 4 に、表記の種類とその使用頻度を理解することで、情報のやり取りであるコミュニケーションの効率を高めることができる。表記が異なるために、理解が不十分となったり、誤解や齟齬が生じたりすることがある。そうした表記の違いによるディスコミュニケーションを抑制・防止することができる。頻度の低い個性的な名前が増えており（Ogihara, 2021a; 2022a; Ogihara et al., 2015; Ogihara & Ito, 2022）、広義でのキラキラネームが増加している（荻原，2022b）ことや、これまで含まれなかった名前の読み仮名を戸籍情報に含めるための戸籍法の改正とそれに伴う議論が行われることで、今後キラキラネームという言葉を用いるコミュニケーションの場が、公的 (1) にも私的にも増えると考えられる。こうした状況を考慮すると、表記の種類とその使用頻度を整理しておくことがより重要となる。特に、科学や科学技術と、人々や社会の間の情報伝達であり、両者の関連を解明したり、その情報伝達の効率を高めることを目的として行われる科学技術コミュニケーションにおいて重要である。名前に関する実証的・科学的研究が実施され、そこから得られた知見や知識が、人々や社会に伝達され共有される過程において、誤解や齟齬を避けることが、正確な理解と適切な応用のために不可欠である。また、人々や社会における現象の正確な報告や生産的・効率的な議論から、実証的・科学的研究を行うためにも、表記の種類とその使用頻度を正確に理解しておくことが重要である。

1.2「キラキラネーム」の表記

荻原（2022a）は、6 つの代表的な辞典・事典に掲載されているキラキラネーム及び DQN ネームの定義を整理した。その結果、「きらきらネーム」と表記していた辞典が 2 つであったのに対し、「キラキラネーム」と表記していた辞典・事典が 4 つであり、「きらきらネーム」と比べて「キラキラネーム」の方が使用頻度の高い表記であることを報告している（表 1; 詳細は、荻原（2022a）を参照）。同様に、「dqn ネーム」と「ドキュンネーム」と表記していた辞典・事典はなく、「どきゅんネーム」と表記していた辞典がひとつのみであり、「DQN ネーム」と表記していた辞典・事典が 3 つあり、「DQN ネーム」が使用頻度の最も高い表記であることを報告している。

しかし、先行研究では辞典・事典という、日本社会・文化で一般的に共有される情報を扱う媒体しか検討されておらず、他の媒体でも同様の結果が得られるかは明らかではない。媒体によって表記の用いられ方が異なる場合、媒体の特徴とその表記の用いられ方の違いを検討することによって、キラキラネームと DQN ネームという言葉の意味や機能を明らかにすることができる。媒体によって表記の用いられ方が一貫している場合は、その表記の一般性・普遍性を実証することにつながる。そこで本研究では、同様に日本社会・文化で共有される情報を扱うマスメディアと学術コミュニティにおいて、「キラキラネーム」と「DQN ネーム」を中心とした表記にどのような種類があるのか、そしてそれらがどの程度使用されているのかを検討する。

1.3 本研究

本研究では、主に以下の 3 つの理由から、マスメディアとして新聞を対象に分析を行う。第 1 に、新聞はテレビ・ラジオ・雑誌と並んで 4 大マスメディアのひとつであり、多くの人が関与し、社会・文化を構成する重要なメディアである。第 2 に、主要な全国紙がそれぞれ利便性の高い包括的なデータベースを提供しているため、実証的な分析を行いやすい。第 3 に、本研究の目的を考慮すると、メディアの性質上、新聞が最も適していると考えられる。ラジオは、音声が主体であり、文字の表記を扱うには適していない。同様に、テレビも映像と音声が主体となりやすく、文字の表記を検討するには適しているとは言いづらい。雑誌は、新聞と近いメディアと言えるが、雑誌の種類が多く、雑誌ごとの分散が大きいと推測されるため、代表性の高い検証が難しい。その点、新聞は文字が主体であるため、文字の表記を扱うのに最適であり、多

表 1：辞典・事典における「キラキラネーム」類似表記と「DQN ネーム」類似表記のまとめ

	掲載媒体数	掲載媒体
キラキラネーム	4	イミダス・知恵蔵 mini・実用日本語表現辞典・ウィキペディア
きらきらネーム	2	大辞林・大辞泉
DQN ネーム	3	知恵蔵 mini・実用日本語表現辞典・ウィキペディア
dqn ネーム	0	―
ドキュンネーム	0	―
どきゅんネーム	1	大辞泉

注：荻原（2022a）表 1 を基に作成。詳細は、荻原（2022a）を参照。

くの人が関与する複数の全国紙を分析することで、代表性の高い検証が可能である。

また、本研究では学術コミュニティとして学術文献を対象に分析を行う。学術コミュニティを構成する最も基礎的かつ重要な媒体が、学術文献である。研究者が発見・検証した知見を報告したり、過去の知見に対する吟味・批判・修正などが、学術文献を通じて行われる。また、研究知見として歴史をかけて蓄積されており、学術コミュニティの根幹をなすものと言える。

2. 方法

2.1 データベース

2.1.1 新聞

三大全国紙である読売新聞・朝日新聞・毎日新聞に加えて、経済専門紙である日本経済新聞を対象とした。4つの新聞社が提供している、記事データベース（読売新聞：「ヨミダス歴史館」、朝日新聞：「朝日新聞クロスサーチ」、毎日新聞：「毎索」、日本経済新聞：「日経テレコン21」）を用いて検索を行った。

完全一致した際の検索結果を用いた。検索対象は、見出しと本文とした。同一の記事が重複して検索結果に出現する場合があったため、重複を差し引いてカウントした。検索は2022年8月に行った。

2.1.2 学術文献

Google Scholar と CiNii（Citation Information by National Institute of Informatics）を用いて検索を行った。Google Scholar とは、世間一般で用いられている Google 検索の学術版であり、論文や書籍、学会発表集、学位論文など幅広い学術文献を包括的に検索可能なデータベースである。その網羅性と利便性、信頼性の高さから、学術コミュニティにおいて、広く一般的に用いられている。

CiNii とは、国立情報学研究所（National Institute of Informatics; NII）が運営する統合型学術データベースである。科学技術振興機構（Japan Science and Technology Agency; JST）による J-STAGE や、各大学・研究機関による機関レポジトリなどの様々なデータベースを集約し、学術論文、博士論文、学会・協会の刊行物、大学の研究紀要、各種雑誌・図書などの学術情報を一元的に検索することが可能である。特に日本語による学術文献を検索する際に、広く一般的に用いられるデータベースと言える。

Google Scholar において、日本語のページを検索対象とした。検索演算子（引用符）を用いて、完全一致した際の検索結果を用いた。Google 検索では、完全一致検索を行っても、大文字と小文字は区別されないため、「DQN ネーム」と「dqn ネーム」は検索結果のページからそれぞれカウントした。また、引用部分を含めた検索を行うと、明らかに関連がない文献が複数含まれていたため、引用部分は含めずに検索を行った。特許は含めずに検索を行った。同一の文献が重複して検索結果に出現することはなかった。検索は2022年8月に行った。

CiNii において、日本語のページを検索対象とした。検索演算子（スラッシュ）を用いて、完全一致した際の検索結果を用いた。Google 検索と同様に、CiNii では、完全一致検索を行っても、大文字と小文字は区別されないため、「DQN ネーム」と「dqn ネーム」は検索結果のページからそれぞれカウントした。また、CiNii では、完全一致検索を行っても、ひらがなとカタカナは区別されないため、検索結果のページからそれぞれカウントした。同一の文献が重複して検索結果に出現する場合があったため、重複を差し引いてカウントした。検索は2022年8月に行った。

2.2 ターゲット語

対象としたターゲット語を表2に示した。「キラキラネーム」は、「キラキラ」と「ネーム」で構成されているため、それぞれの要素において考えられる表記を組み合わせて検索を行った。具体的には、「キラキラ」はカタカナだけでなく、ひらがなの「きらきら」でも表記が考えられた。「ネーム」は、ひらがなの「ねーむ」と漢字の「名前」および「名」が考えられた。よって、それぞれの表記を組み合わせて、2（「キラキラ」・「きらきら」）× 4（「ネーム」・「ねーむ」・「名前」・「名」）の8通りのターゲット語を検索した。

同様に、「DQN ネーム」は、「DQN」と「ネーム」で構成されており、「DQN」には大文字アルファベットによる表記だけでなく、小文字アルファベットによる表記（「dqn」）とカタカナ表記（「ドキュン」）、ひらがな表記（「どきゅん」）が考えられた。そして「ネーム」については、上記の通り、4つ（「ネーム」・「ねーむ」・「名前」・「名」）の表記が考えられた。よって、それぞれの表記を組み合わせて、4（「DQN」・「dqn」・「ドキュン」・「どきゅん」）× 4（「ネーム」・「ねーむ」・「名前」・「名」）の16通りのターゲット語を検索した。[(2)]

3. 結果

3.1 新聞

3.1.1「キラキラネーム」表記

各新聞におけるターゲット語の使用頻度を表2に示した。読売新聞では、「キラキラネーム」以外の表記は見られず、「キラキラネーム」ですべて統一されていた。

朝日新聞でも、「きらきらネーム」と「キラキラ名」もわずかに見られたが、ほぼすべてが「キラキラネーム」として使用されていた。「キラキラ名」は、3件の内2件が、読者投稿による短歌と川柳で用いられていた。また、「キラキラ名」を用いていた3件の記事の内2件で、「キラキラネーム」の表記も同時に用いられていた。

毎日新聞でも、ほとんどが「キラキラネーム」として使用されていた。「キラキラ名」が比較的多く見られたが、すべて読者投稿による川柳で用いられていた。「キラキラ名前」が1件のみ見られたが、記事内に「キラキラネーム」の表記も同時に用いられていた。

日本経済新聞は、経済専門紙であるために、読売・朝日・毎日新聞と比べて使用頻度は低かった。読売新聞と同様に、すべてが「キラキラネーム」として使用されていた。

まとめると、対象とした4つ全ての新聞で、ほとんどの

記述が「キラキラネーム」として行われていた。「きらきらネーム」や「キラキラ名前」、「キラキラ名」も見られたが、その割合はわずかであった。「キラキラ名」は、ほぼすべてが読者投稿による短歌と川柳で用いられていた。

3.1.2「DQN ネーム」表記

各新聞におけるターゲット語の使用頻度を表 2 に示した。すべての新聞で、「DQN ネーム」とそれに類似する表記は使用されていなかった。

3.2 学術文献

3.2.1「キラキラネーム」表記

学術文献におけるターゲット語の使用頻度を表 2 に示した。Google Scholar と CiNii の結果のパターンは一貫していた。新聞記事と同様に、ほぼすべてが「キラキラネーム」として記述されていた。「きらきらネーム」も用いられていたが、その使用はわずかであった。「きらきらネーム」を使用していた文献では、「キラキラネーム」は使用されていなかった。

3.2.2「DQN ネーム」表記

学術文献におけるターゲット語の使用頻度を表 2 に示した。Google Scholar と CiNii 共に、新聞とは異なり、「DQN ネーム」とその類似表記が見られた。最も多かったのは「DQN ネーム」で、Google Scholar では「ドキュンネーム」もわずかに見られており、CiNii では見られなかった。「ドキュンネーム」を用いていた 3 件の文献の内 1 件（牧野, 2012）で、「DQN ネーム」の表記も同時に用いられていた。

4. 考察

4.1 新聞における使用

全ての新聞で、「キラキラネーム」表記が、最も一般的であり、ほとんどの記述に用いられていた。よって、新聞を対象とした検索を行う時や新聞に関するコミュニ

表 2：新聞と学術文献における「キラキラネーム」類似表記と「DQN ネーム」類似表記の使用頻度

	ターゲット語	新聞				学術文献	
		読売新聞	朝日新聞	毎日新聞	日本経済新聞	Google Scholar	CiNii
キラキラネーム	キラキラネーム	68 (100 %)	75 (93.75 %)	66 (78.57 %)	14 (100 %)	35 (94.59 %)	23 (95.83 %)
	きらきらネーム	0	4 (5.00 %)	1 (1.19 %)	0	2 (5.41 %)	1 (4.17 %)
	キラキラねーむ	0	0	0	0	0	0
	きらきらねーむ	0	0	0	0	0	0
	キラキラ名前	0	0	1[b] (1.19 %)	0	0	0
	きらきら名前	0	0	0	0	0	0
	キラキラ名	0	3[a] (3.75 %)	17 (20.24 %)	0	0	0
	きらきら名	0	0	0	0	0	0
	合計	68 (100 %)	80 (102.50 %)	84 (101.19 %)	14 (100 %)	37 (100 %)	24 (100 %)
DQN ネーム	DQN ネーム	0	0	0	0	6 (75.00 %)	2 (100 %)
	dqn ネーム	0	0	0	0	0	0
	ドキュンネーム	0	0	0	0	3[c] (37.50 %)	0
	どきゅんネーム	0	0	0	0	0	0
	DQN ねーむ	0	0	0	0	0	0
	dqn ねーむ	0	0	0	0	0	0
	ドキュンねーむ	0	0	0	0	0	0
	どきゅんねーむ	0	0	0	0	0	0
	DQN 名前	0	0	0	0	0	0
	dqn 名前	0	0	0	0	0	0
	ドキュン名前	0	0	0	0	0	0
	どきゅん名前	0	0	0	0	0	0
	DQN 名	0	0	0	0	0	0
	dqn 名	0	0	0	0	0	0
	ドキュン名	0	0	0	0	0	0
	どきゅん名	0	0	0	0	0	0
	合計	0	0	0	0	8 (112.50 %)	2 (100 %)

注：括弧内は、「キラキラネーム」と「DQN ネーム」それぞれの類似表記における使用割合を示す。[a] 3 件の内 2 件で記事内に「キラキラネーム」の表記も同時に見られた。そのため、朝日新聞における「キラキラネーム」の類似表記全ての使用割合の合計値は 100 % を超えている（102.50 %）。[b] 記事内に「キラキラネーム」の表記も同時に見られた。そのため、毎日新聞における「キラキラネーム」の類似表記全ての使用割合の合計値は 100 % を超えている（101.19 %）。[c] 3 件の内 1 件で文献内に「DQN ネーム」の表記も同時に見られた。そのため、Google Scholar における「DQN ネーム」の類似表記全ての使用割合の合計値は 100 % を超えている（112.50 %）。

ケーションを行う時には、「キラキラネーム」を用いることが、最も効率的であると言える。

「きらきらネーム」や「キラキラ名前」、「キラキラ名」も見られたが、その使用割合はわずかであった。「キラキラ名前」と「キラキラ名」という表記は、文字数の制限が厳しい記事紙面や音数に制約がある川柳・俳句・短歌等の詩歌において、少しでも文字数や音数を減らすために用いられていたと考えられる。「キラキラネーム」の代わりに、「キラキラ名前」と「キラキラ名」を用いることで、意味を維持したまま、文字数や音数を減らすことができるようである。

一方、「DQN ネーム」とその類似表記は、新聞ではまったく使用されていなかった。これらの表記には、否定的・侮蔑的なニュアンスがあるために、マスメディアにおける使用は避けられていると考えられる（荻原，2022a）。公共性の高い媒体においては、「DQN ネーム」とその類似表記は控えられており、主に「キラキラネーム」が使用されているようである。状況や目的にもよるが、公共性が高い媒体においては、「DQN ネーム」とその類似表記は検索対象となりにくく、「DQN ネーム」とその類似表記を使用しないことが適切と考えられる。

これらの結果から、「DQN ネーム」とその類似表記は、「キラキラネーム」とその類似表記とは質的に異なり、公共性の高い媒体では使用が控えられるような否定的・侮蔑的なニュアンスを含んでいることが示されたとも言える。よって、キラキラネームと DQN ネームは概念的に異なる存在であると考えられる。先行研究（荻原，2022a）では、大辞泉と知恵蔵 mini のふたつの辞典・事典が両者を同義として扱い、実用日本語表現辞典とウィキペディアのふたつの辞典・事典が両者を異なる存在として扱い、残りの大辞林とイミダスでは両者の違いについての言及が見られないことを報告していた。本研究の結果は、実用日本語表現辞典とウィキペディアの記述が、現実をより正確に反映していることを示していると言える。

4.2 学術文献における使用

新聞と同様に、「きらきらネーム」もわずかに使用されていたが、学術文献においてほとんどの表記が「キラキラネーム」であった。よって、学術文献を対象とした検索を行う時や学術文献に関するコミュニケーションを行う時には、「キラキラネーム」を用いることが、最も効率的であると言える。

一方、新聞とは異なり、学術文献では「DQN ネーム」とその類似表記がわずかではあるが使用されていた。これらの表記には、否定的・侮蔑的なニュアンスがあり、公共性の高いマスメディアでは避けられていたが、そうした否定的なニュアンスがあること自体が、記述したり考察すべき対象であるため、「DQN ネーム」とその類似表記が少数ながら見られたと考えられる。[(3)] よって、学術文献を対象とした検索を行う際には、「キラキラネーム」だけでなく、「DQN ネーム」とその類似表記についても対象とすることが必要である。

4.3 まとめ

先行研究（荻原，2022a）で報告された辞典・事典と、本研究で検討した新聞と学術文献における表記の使用頻度のパターンを表 3 にまとめた。新聞と学術文献における表記の使用頻度のパターンは、基本的に辞典・事典におけるパターンと一致していた。つまり、「キラキラネーム」と「DQN ネーム」がそれぞれの類似表記の中で最も用いられており、その他の表記はほとんど用いられていなかった。

一方で、辞典・事典における表記とは異なる点が 3 点見られた。第 1 に、新聞では「DQN ネーム」類似表記が用いられていなかった。先述した通り、公共性の高いマスメディアでは、否定的・侮蔑的なニュアンスを避けるために、「DQN ネーム」とその類似表記の使用を控えていると考えられる。第 2 に、新聞では、辞典・事典と異なり、「キラキラ名」や「キラキラ名前」という、「きらきらネーム」以外の類似表記がわずかながら用いられていた。先述の通り、文字数の制限が厳しい記事紙面や音数に制約がある川柳・俳句・短歌等の詩歌では、少しでも文字数や音数を減らすために、「キラキラ名前」と「キラキラ名」という表記が用いられていたと考えられる。第 3 に、学術文献では「どきゅんネーム」ではなく、「ドキュンネーム」が用いられていた。これはおそらく、「キラキラネーム」と対応させるために、同じカタカナ表記を用いていると考えられる。実際に、「ドキュンネーム」を使用していた 3 つの文献ではすべて、「キラキラネーム」という表記も同時に用いられていた。

こうした媒体ごとの違いを把握することで、「キラキラネーム」と「DQN ネーム」の意味や機能を明らかにし、検索方法やコミュニケーションにおける言及の仕方を媒体によって効率的に使い分けることが可能となった。特に、表記の種類とその使用頻度を正確に理解することで、科学技術コミュニケーションにおける誤解や齟齬を抑制・防止し、科学技術と人々や社会における情報伝達の効率を高めることに貢献する。さらに、名前に関する実証的・科学的研究によって得られた知見や知識の正確な理解と

表 3：各媒体における「キラキラネーム」類似表記と「DQN ネーム」類似表記の使用頻度のまとめ

	「キラキラネーム」類似表記	「DQN ネーム」類似表記
辞典・事典	キラキラネーム ＞ きらきらネーム	DQN ネーム ＞ どきゅんネーム
新聞	キラキラネーム ＞ きらきらネーム・キラキラ名・キラキラ名前	使用なし
学術文献	キラキラネーム ＞ きらきらネーム	DQN ネーム ＞ ドキュンネーム

注：辞典・事典の結果は荻原（2022a）に基づく。記載がない表記は、それぞれの媒体で用いられていなかったことを示す。

適切な応用、人々や社会における現象の正確な報告や生産的・効率的な議論を可能にし、翻って実証的・科学的研究を促進することに繋がる。

4.4 本研究の限界点と今後の展望

本研究の限界点として、2点述べる。第1に、本研究では、マスメディアの中で新聞を対象に検討を行った。先述の通り、本研究の目的を果たすためには、テレビとラジオ、雑誌と比較して新聞が最も適切なメディアであった。しかし、他のマスメディアでは表記の種類やその使用され方が異なるかもしれない。例えば、雑誌では、新聞とは異なる使用のパターンが見られる可能性もある。雑誌についてはその種類の多さから、代表性の高い検証が難しいが、これらの媒体についても検討することで、新たな側面からキラキラネームやDQNネームに迫ることができるかもしれない。

第2に、本研究では、辞典・事典を検討した先行研究を基に、マスメディアと学術コミュニティという2つの集団における表記とその使用頻度を明らかにした。しかし、集団レベルの使用と、個人レベルの使用のパターンは異なる可能性がある（e.g., Ogihara, 2022b）。例えば、否定的・侮蔑的なニュアンスのある「DQNネーム」とその類似表記は、公共性の高い集団レベルのメディアでは使用は控えられていたが、公共性が相対的に低くなりがちな個人レベルのメディア（e.g., SNS、ブログ）ではより多く使用されているかもしれない（e.g., 小林，2009）。キラキラネームやDQNネームとは何か、そしてそれらが社会の中でどのような意味や機能を持っているのかを明らかにするためにも、今後は個人レベルでの表記とその使用頻度についても検討することが重要と考えられる。

注

(1) 既に、法務大臣の諮問機関であり、戸籍法の改正に向けた中間試案を作成した法務省法制審議会戸籍法部会における公的な会議において、キラキラネームという言葉が複数回に渡って用いられている（法務省，2021; 2022）。法律の改正に関わる議論の中で、ひとつの重要な概念として言及されていた。第一回会議の議事録には「きらきらネーム」、第四回会議の議事録には「キラキラネーム」と表記されていた。

(2) 荻原（2022a）が検討した辞典・事典において、これらの全ターゲット語の内、荻原（2022a）で報告されていた「キラキラネーム」・「きらきらネーム」、そして「DQNネーム」・「dqnネーム」・「ドキュンネーム」・「どきゅんネーム」以外の表記が見られるか再度確認した所、どの表記も用いられていなかった。

(3) 「DQNネーム」とその類似表記の使用を推奨している訳ではない。倫理的な点を考慮すると、状況や目的に応じた使用が求められ、特に一般的な場面での使用には注意が必要である。

引用文献

法務省（2021）．法制審議会戸籍法部会第1回会議（令和3年11月25日開催）．https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20211125.html.

法務省（2022）．法制審議会戸籍法部会第4回会議（令和4年3月17日開催）．https://www.moj.go.jp/shingi1/koseki20220317_00003.html.

小林康正（2009）．名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク．風響社.

牧野恭仁雄（2012）．子供の名前が危ないKKベストセラーズ.

荻原祐二（2015）．近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型．人間環境学研究，13（2），177-183.

Ogihara, Y. (2020). Unique names in China: Insights from research in Japan—Commentary: Increasing need for uniqueness in contemporary China: Empirical evidence. *Frontiers in Psychology*, 11, 2136.

Ogihara, Y. (2021a). Direct evidence of the increase in unique names in Japan: The rise of individualism. *Current Research in Behavioral Sciences*, 2, 100056.

Ogihara, Y. (2021b). How to read uncommon names in present-day Japan: A guide for non-native Japanese speakers. *Frontiers in Communication*, 6, 631907.

Ogihara, Y. (2021c). I know the name well, but cannot read it correctly: Difficulties in reading recent Japanese names. *Humanities and Social Sciences Communications*, 8, 151.

Ogihara, Y. (2022a). Common names decreased in Japan: Further evidence of an increase in individualism. *Experimental Results*, 3, e5.

Ogihara, Y. (2022b). Ethnic differences in names in China: A comparison between Chinese Mongolian and Han Chinese cultures in Inner Mongolia. *F1000Research*, 11, 55.

Ogihara, Y. (2022c). Further explanations for difficulties in reading recent Japanese names correctly. *Frontiers in Education*, 6, 799119.

荻原祐二（2022a）．キラキラネームの定義とその構成要素．人間環境学研究，20（2），71-79.

荻原祐二（2022b）．キラキラネームは本当に増加しているのか？人間環境学研究，20（2），129-133.

荻原祐二（2022c）．名前を正しく読むことはなぜ難しいのか．人文×社会，2（8），1-7.

Ogihara, Y., Fujita, H., Tominaga, H., Ishigaki, S., Kashimoto, T., Takahashi, A., Toyohara, K., & Uchida, Y. (2015). Are common names becoming less common? The rise in uniqueness and individualism in Japan. *Frontiers in Psychology*, 6, 1490.

Ogihara, Y., & Ito, A. (2022). Unique names increased in Japan over 40 years: Baby names published in municipality newsletters show a rise in individualism, 1979-2018. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, 3, 100046.

（受稿：2022年11月24日　受理：2023年1月30日）